

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	庭球部 : 部報
Author(s)	
Citation	龍南, 248 : 131 - 132
Issue date	1941-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8456
Right	

した高津前部長に部員一同の深甚なる感謝を捧げます。

二六〇一、一、四

庭球部

庭球部委員

我等は五高のモットーである質實剛健を、部のモットーとして常に練習に精進し、心身の鍛錬に努めてゐるのである。而して吾等は庭球を通じて何かを獲得しやうと云ふ風に努力してゐる。決して運動のために運動をすと云ふやうな興味本位に終りたくないと考へてゐる。

今回長き歴史を有する龍南會が、發展的解消を遂げて龍南學徒報國團となり、我庭球部は其一部となつたが、此新体制の下に於ても、吾等は従前の考を更に新にして益々努力せねばならんと決心を強くするものである。かく考へて昨年の戦績を顧みると次の通りであるが、これではいけない、モットー吾等は努力して新体制の下、更に一段の練習が必要である、而して白霜原に於て鍛へたる此五高魂を以て大に活躍しやう。

庭球部戦績

四 高校、戦 於 五 高

第一回戦 對 佐高 五：〇 勝

決勝戦 對 福高 三：二 勝(五高)

五 高 福 高

二 〇 (坂田) 六：一〇 (園内)

一 (井野上) 四：一六 (兒玉)

三 〇 望月 七：五 山田

二 〇 白 六：三 小岩井

一 井上 一：六 兒玉

インターハイ九州ゾーン 於 九 大

第一回戦 對 山口高 三：二 勝

第二回戦 對 城大豫科 三：二 勝

準決勝戦 對 廣島高 三：二 負

五 高 廣 島 高

二 (坂田) 三：一六 (岡本)

一 (井野上) 二：一六 (桂上)

三 〇 望月 六：二 武 廣

二 〇 白 四：一六 岡 本

一 〇 井上 二：六 井 上

對 福 高 戰 於 福 高 六：三 勝（五高）

一	望 月	三 四	三 六	山 田
二	◎ 鳥 巢	六 六	三 四	園 本
三	◎ 池 田	六 七	二 五	藏 内
四	◎ 堤	七 七	五 五	安 藤
五	◎ 伊 藤	八 一	三 六	小 山
六	森	三 二	六 六	西 原
一	◎ 望 鳥 巢	六 四	二 一	◎ 園 本
二	◎ 松 伊 藤	六 六	二 四	◎ 小 西 原
三	◎ 池 田	六 六	一 八	◎ 太 田

騎 道 部

田 上

國道の進展に伴ふ新体制に即し、我龍南會も發展的解

消をなし吾々の舊馬術部も騎道部と改名、堂々四十有八名の新舊部員を擁し一致團結、敢爲忍耐努力の三旗幟を標榜し、龍南の血潮たぎる胸を撫しつつも、暫くも醉はんとする自由の夢をかなぐり捨てて只汝我没入、身を三界の馬に託し動中靜を得、靜中動を得んものと、只管向上の一途を辿りつつあるのが現在の我が部の姿である。而も一週一度か二度の極度の練習制限に阻まれ乍ら、或は夏のインターハイ、秋の支部對抗試合に勝たんとするは業か技術か、然らず只不撓不屈の意氣と熱とを以てである。我々は黙々として所謂軍隊精神なるものを感得しつつ引き締つた嚴肅な氣で練習して來た。時としては家々に灯が燈り頭上に星がきらめく頃馬の手入をなした事もあつたが、吾々に取り練習は即一週の生活の總決算、或は行とも言ふべきものに外ならなかつた。而して今や普及しつつある馬術を通して少くとも我々のみが体得する唯一のものがある。而して我々は夫に依り、自らを強め練り上げてゐるのだ。突然馬が狂奔する。手綱を引く、指導者から言はれた通りの馬の阻止法全てを試みる。だが駄目だ。馬は無暗矢鱈に走る。藪がある。石がある。水溜り。馬は一向お構ひなしだ。耳がガンガン言ふ。冷靜な頭での色々な觀念まで淺間しくなる。いよいよ馬は狂ふ。もう夢中だ。もう何もかもない。弱い極めて弱い